

岐阜農林事務所の普及活動状況

平成28年7月31日現在

今月の重点活動

■いちご 経営診断ドックを開始

6月28日～7月20日にかけて、JAぎふと農業普及課の担当者で、13名の若手生産者を対象とした経営診断ドックを実施した。

経営診断ドックとは、JAぎふが中心となり、JA全農岐阜のいちご研修所卒業生を中心とした若手生産者21名の経営データを経営診断ソフトに入力し、出荷実績や農業所得などの個別の順位や平均値を算出し、それに基づいた診断結果により経営上の課題などについて、個別に指導を行うものである。

当ドックを受けた生産者からは、「自分の経営がどのくらいの位置なのか、どの経費をかけすぎているのか、客観的な数値で分かりやすかった。」などの意見があり、好評であった。

今後、農業普及課では、関係機関と連携し、若手生産者に対する経営指導を継続するなど経営安定に向けた支援を行う予定である。

(園芸産地支援第一係・小島康平、三和浩一)



【経営診断ドックの様子】

活力ある新産地づくり

■ブロッコリー 育苗始まる

JAぎふブロッコリー生産連絡協議会では、管内の花き生産者に管理委託し、苗の確保を行っている。7月26日には、1回目のは種作業が行われ、今後、は種作業は8月下旬まで続く計画である。

平成28年度は作期拡大に伴って苗の注文数が増え、栽培面積も20.2haとなる見込みである。農業普及課では、健苗生産に向け、育苗管理の指導を行っている。

(地域支援第一係・稲葉千佳)



【は種作業の様子】

■アスパラガス 総会・夏芽目揃え会を開催

7月6日、JAぎふ正木支店において、JAぎふ羽島市アスパラガス部会の総会・夏芽目揃え会が開催された。総会では、部会の年間活動計画や規約を見直し、部会活動を活発にし、出荷量を増やしていくことなどが決定された。

夏芽の目揃え会では、岐果岐阜青果の宮脇次長から情勢報告があり、春芽についてはクレームもなく、量販店からの評価も良かったとの報告があった。また、地元の学校給食へ提供するためにも、生産量を増やして欲しいとの激励の言葉があった。

農業普及課からは、スリップス類の調査結果と防除対策、今後の栽培管理について情報提供を行っており、今後ともアスパラガスの安定生産に向け、栽培管理の指導や情報提供を行う予定である。

(園芸産地支援第一係・松浦香絵)



【夏芽の目揃え会の様子】

多様な担い手づくり

■羽島市沖地区 準備委員会の在り方を検討

7月5日、羽島市沖地区の今後の営農を考える準備委員会役員と関係機関とともに、市役所において今後の方針を検討した。昨年度から、隣接する営農組合との合併を検討してきたが、要件が折合わず断念し、単独の営農組織の立ち上げも難しくなった経緯の説明を受けた。

残念な結果ではあったが、準備委員会からは、地域営農の今後を考えるため、この組織が地

域の水田利用を調整できる組織となる方策を模索しており、農業普及課としても、準備委員会の意向を踏まえ、今後も支援していく予定である。

(地域支援第二係・山田隆史)

売れるブランドづくり

■だいこん 若手生産者との意見交換会を開催

岐阜市園芸振興会だいこん部会は、7月25日、JAぎふ鷺山支店において、今年度第3回目となる若手生産者との意見交換会を開催した。

意見交換会に先立ち、農業普及課から、過去3回の議論の経緯などについて説明した。今回は、島・合渡地区役員の参加もあり、それぞれの地区の現状を説明してもらった後、今後の産地のあるべき姿などについての意見交換を行った。

3地区の生産者からは、「規模拡大していくことは簡単なことではない、ここまで産地が縮小すると組織の一本化が必要である、議論するばかりでは何も進まない、産地としての目標が必要である。」など多く意見が出された。

農業普及課では、今後も部会や関係機関と連携し、だいこん産地の振興に向けた支援を行う予定である。

(園芸産地支援第一係・近藤 勝)



【意見交換会の様子】

住みよい農村づくり

■えだまめ 第8回岐阜えだまめの収穫体験を開催

JAぎふえだまめ部会は、7月16日、JAぎふ曾我屋えだまめ選果場において、第8回岐阜えだまめの収穫体験を開催した。

開会セレモニーでは、来賓の挨拶に続いて、平成23年度以降に就農した生産者7名が自己紹介を行い、就農3年目の岸氏が代表して担い手としての決意表明を行った。

また、今年は新たな試みとして、試験品種を含む5品種の食べ比べコーナーを設け、食味アンケートを実施し、来場者の多くが、甘みが強い茶豆風味の品種を好む傾向が明らかとなった。

農業普及課は、収穫体験の円滑な開催に向け、収穫体験ほ場の設置から、栽培管理、開催までの運営全般に係る指導を行った。今年は、開始時間前には長蛇の列ができるなど、多くの来場者があったため、開始間もなく収穫体験用チケットの配布が終了する事態となり、収穫体験を楽しみに来てくれた多くの方をがっかりさせる結果となり、課題も残った。

農業普及課では、今後、収穫体験全般についての反省点、課題などを整理し、部会役員会で提案するなど支援を行う予定である。

(園芸産地支援第一係・川部 知)



【食味アンケートの様子】

■まくわうり まくわうり栽培研究会が出荷を開始

7月18日から、JAぎふおんさい広場真正で、まくわうり研究会による出荷が始まった。今年は、定植後の高温の影響から、平年より1週間程度早く、まくわうりの収穫が始まり、7月23日、24日には1日当たり1,000個の出荷があるなど、早くもピークを迎えている。

急速な生育により、樹勢が弱くなっている株も多く、農業普及課では、今後も生育状況を踏まえた栽培・防除指導を行う予定である。

当研究会は、マスコミ取材もあり、まくわうり料理の紹介など(8月10日放送予定)の対応に追われている。また、7月31日には、今年2回目となる樽見鉄道の「まくわうり列車」(岐阜農林高校の企画)が運行され、まくわうりPRの一翼を担った。

(地域支援第三係・横田京子)



【料理の取材を受ける会員】